**今　日出海 （こん・ひでみ）**

**１、プロフィール**

多芸多能の人。『天皇の帽子』で直木賞受賞。痛快な人物を主人公とした新聞小説を書いて流行作家となる。映画監督、芝居の演出、フランス文学の翻訳もある。初代文化庁長官。

＜生没＞

1903（明治36）年11月６日 ～ 1984（昭和59）年７月30日

＜代表作＞

『山中放浪』『天皇の帽子』『三木清における人間の研究』『迷う人迷えぬ人』『まだまだ夜だ』『海賊』

＜青森との関わり＞

父武平、母綾ともに弘前の人。その三男。今東光は長兄。

**２、作家解説**

小説家、評論家、演出家。函館市生まれ。今東光の弟。東京大学仏文科卒業。大正14年劇団「心座」、昭和５年舟橋聖一らと劇団「蝙蝠座」を起こして演劇活動をする。一方「文芸都市」「作品」「行動」「文学界」等の同人となり、多くの評論、随筆を書く。また、ジードの『地の糧』『二つの交響曲』の翻訳を刊行。ほかに映画の評論、監督など幅広い活動をする。

16年日米開戦とともに徴用され、陸軍報道班員としてフィリピンに従軍、『比島従軍』などを書く。19年再度フィリピンに渡り九死に一生を得て帰国。戦後24年、従軍体験記を『山中放浪』に、25年には、一緒に従軍して知った哲学者三木清を「三木清における人間の研究」等に書く。短編『天皇の帽子』により昭和25年上半期第23回直木賞を受賞。他に人物記、随筆など。多趣多芸多才、機知縦横の明快な作風で知られる。

昭和20年から21年まで文部省芸術課長を勤め、国民行事の一つとなった芸術祭を創始する。43年、文部省に文化庁が創設されるに伴い初代長官に就任、47年退官するまで、広い知識と高い識見により卓抜な行政手腕を示し、国民文化の向上に大きく貢献した。殊に伝統文化の保存と地方文化の育成に功績をあげた。

**３、資料紹介**

〇『山中放浪』

図書（中公文庫）

1978（昭和53）年12月10日

150mm×105mm

昭和20年４月、アメリカ軍に包囲されたフィリピン・ルソン島の山中を主人公が敗走する様相を描く。長大作ではないが、豊富多彩な要素と体験に満たされている。「あとがき」に日記帳４冊を基にまとめたものとある。戦争のもつ悲惨さを伝えて迫力がある。